

オデュッセウスからアウグストゥスまで

——初期鉄器時代からローマ時代までのイタカ

C. モーガン

(周藤芳幸・長尾美里訳)

在アテネ・イギリス研究所所長
ロンドン大学キングスカレッジ教授

はじめに

イタカ島は古代を通して、ペロポネソス半島、中部ギリシアそして南イタリアを結ぶ海上ルートの要地でした。この島はイタリアとの強いつながりをもつ世界の東端であると同時に、古来のギリシアのポリス世界の西端にもあたる場所に位置しています。イタリアとの密接な結びつきは、前189/8年以降のローマによる支配をもたらした一連の経緯においても、また、ギリシア西岸地域に独特のローマ化のパターンにおいても明らかですが、初期鉄器時代のアエトス遺跡の物質文化が示すように、その西方との交渉の歴史はもっと古い時代にまで遡ることができます。また、東方とのつながりは、アエトスからの出土遺物の中に、知られている限り最古のアカイア式アルファベットで賓客関係に言及する刻文が存在することによく示されています。イタカ島を、この東西ギリシアのネットワークの中に位置づけるとともに、レウカス島とケファロニア島を結ぶイオニア海一帯の一部として考察することは、集落の歴史と国際関係に関するギリシア西岸地域独特のパターンを明らかにするものです。この島は「植民市」でもなければエーゲ海世界の一部でもありませんが、一方で単なる交流地として片づけることもできません。むしろ、活発な在地の力があらかじめ存在し、さらにそれがヘレニズム時代以降に西方世界というより大きな地域単位へと発展していく一因となったのです。この西方的な様相は、ザキュントス島、レウカス島、ニコポリス、ストラトス、そしてケファロニアといった周辺地域での調査数が増加するにつれて次第に明らかになってきました。このような背景のもとで、強力なイタカ人アイデンティティというものがある、そしてなぜ顕著になっていったのか、またそのアイデンティティが政治的・経済的な状況の変化の中でどのように構築されたのかについて検討することは興味深いことでしょう。

今回の報告は、私とアンドラス・ソティリウとの共同監督の下、BSAとケファロニアの第35エフォリア

(ギリシア政府の埋蔵文化財担当局)によって合同調査が行われた、先史時代から近代までのイタカ島の集落史に関する大規模な研究の一部について紹介することを意図しています。この研究は、BSAが1930年から1938年の間に行った調査の最終報告と、現代のスタヴロス村の近郊で行われた踏査や景観の復元、そして発掘調査の成果とを総合するものです。このプロジェクトが始まるまで、イタカ島の歴史を考えるための手がかりとしては、ポリス洞窟、トリス・ランガダス、ピリカタ/スタヴロス、アエトスからの遺物に関する不十分な報告書や、イタカ島(主に北部)で行われたその他の調査に関するわずかな言及や紀行文、そして偶然に発見された遺物などしか存在していませんでした。しかし、ここ数十年に及ぶBSAのメンバーによる調査は、イタカ島における初めての安定した長期にわたる考古学的な活動となりました。その過程で、メンバーは当時流行した個人所有のコレクションの中の多くの資料や、偶然発見された遺物、そしていくつか記録に残っている非公式の調査で見つかった遺物を目にする事になりました。ですから、実際には公式・非公式な方法で手に入れられた考慮すべき膨大な情報が存在していたのです。このように、存在する情報と公刊された報告とのあいだに大きなギャップがあったことを考慮すれば、イタカ島についての従来の叙述が、外部からの視点で、イタカ島の住民やイオニア諸島のネットワークなどを顧慮することなく行われてきたのは、やむをえないことであつたと言えるでしょう。私たちの研究は、少なくとも紀元後7世紀までは連続して居住されていた(そしてその後も断続的ながら中世からヴェネチア時代にかけて居住されていた)集落遺跡、及び墓から工房にいたるさまざまな機能をもつ遺構の調査を通じて、このような傾向を是正することにあります。個々の遺跡からの出土品の数はそれほど多くはないものの、それらを19世紀初頭から20世紀に行われた発掘調査や紀行文(ゲル、ハラール・フォン・ハラールシュタイン、シュリーマン、デルプフェルト、フォルグラフらといった考古学者の手に

よるもの)などと統合することで、集落の歴史、在地の手工業や搬入品についての分析を可能とするデータを手に入れることができます。今日の概観では、初期鉄器時代からローマ時代までのケーススタディを紹介することしかできませんが、プロジェクト自体はもっと幅広い領域を対象としています。例えば、調査で得られた重要な成果の一つに、中世後期から現代にいたる物質文化、とりわけ1953年の大地震の後の集団移住によって急速に姿を消しつつある領域部の農業生産施設などの記録化があります。この点で、私たちの調査は、とりわけ近隣のメガニシ島を舞台に移民期の島嶼アイデンティティについて人類学的調査を行っているロジャー・ジャストの重要な研究を補足する性格をもっています。古代のイタカ島について述べている史料が乏しいことは事実ですが、公証人や衛生官らの記録、またヴェネチアやイオニア七島連邦時代(1800~1808年)の文書には、土地所有、海運業、商品貿易のあり方についての膨大なデータが含まれており、これらのデータはそれ自体注目に値するものであると同時に、私たちのフィールド調査における発見に貴重な洞察を与えてくれます。

イタカ島の地理と景観

多くの点において、イタカ島の集落と経済の歴史は、イオニア海島嶼部全域に共通する変化を反映しています。もし私がイタカ島におけるローカルな適応に焦点を絞る、他の島々との発展の比較についてはスケッチにとどめるとしても、それは、このような幅広い視野を疎かにするものではありません。今回私が採用するアプローチとは対照的なものとして、2002年にクラウド・ランズボグがケファロニアの調査でとったアプローチをあげることができますが、そこで彼は単純にイタカ島をケファロニアの議論の中に組み込み、とても一般的なプロセスで議論を進めました。しかし、イタカ島は特殊な土地でもあります。岩がちで耕作地が限られているため(また、それを防衛する力にも乏しいため)、多くの人口を支えるためには、海上交易や商品作物の生産に依存せざるをえません。また、島の内部に緩衝装置がないため、人口は外部の変化によって大きく変動することを余儀なくされます。これは今日、「小さな島」に特有の現象として認識されていますが、イタカ島の場合は他の島々(たとえばアンディキテラ島)の場合よりも複雑かもしれません。私たちの得たデータからは、以下の3点の相互に

関連する長期的なプロセスが働いていたことを確認することができます。第一に、南北の対比が挙げられます。島はアエトスの北(現代のハニ)の地峡で結ばれた二つの部分で構成され、島の北部(ネリトン山周辺)が狭いものの視覚的にはつながった一連の小規模な耕作地からなっているのに対して、南部はより広いもののはっきりと区画された平野からなっているという景観上のコントラストが認められます。北部に関する考古学的知見は比較的豊富ですが、南部ではアエトス(とデクシアのニンフの洞窟)を除いて組織的な調査はまだ行われておらず、遺跡の数もあまり多くありません。アエトスでの発掘調査時にBSAのメンバーが南部の平野とヴァシ南東で予備調査を行いました。ヴァシ博物館に収蔵されている数少ない遺物のうち、当時の収集品に由来するものは近代のものでした。旅行家ゲルは、ミニマタで出土した石棺について報告しており、マラティアと関連付けてこの地をネクロポリスと解釈しました。さらに(未公開ですが)他の石棺も各地の海岸エリアで報告されており、これらが孤立した遺物であったことは疑わしいのです。ゲルが執筆した当時、アエトス郊外で見つかった前ローマ時代の遺物はそれ以外ほとんどありませんでした。ヴァシの町を取り囲む丘陵地から出土した古典期の破片はいくつかありますが、それでもわずかです。古典史料において、通常イタカ島は一つのポリスとみなされています。そしてポリスの中心市の特定は長い間議論的となっていました。19世紀初頭、ウィリアム・ゲルは二つの中心市が共存しえたことを疑問視して、当時の主要な集落であったスタヴロスに古代の中心市を求めました。しかし、稀な中断期間を別とすれば、イタカ島にはそれぞれが外部との交渉と内部の組織をもつ二つの人口集中地があったようです。南部ではアエトスが唯一、イタカ島の西海岸沿いと海峡を挟んだケファロニア西部の城塞を遠望することができる場所ですが、北部の集落分布のバランスは相互に見ることができる範囲の中で移動していました。

第二の要因は、経済戦略と関連する人口のレベルです。1953年までのすべての時代のデータは、二つの基本的な適応戦略の存在を明らかにしています。一つは、イタカ島そのものでの労働人口が少なかったのに対して、海上での活動と島外(近隣諸島とアカルナニア沿岸部)での農耕にかなりの労働力が向けられていたこと。そしてもう一つは、島内の労働力が対外市場向けの商品作物の集約的な生産に向けられていたことでした(これはかなりの程度、諸島連邦や帝国の統合

と関連していました)。

第三の要因は、標高、輸送ルート、アクセスのしやすさといった集落の立地条件です。防衛に優れた地点から南北を見渡すことができ、入り江と耕作地帯の両方にアクセスすることができる島の西側は、常に集落の場所として好まれました。一方東部は起伏が激しいため視界がよくありません。イタカの港については、ヴァシだけが喫水の深い船を入港させることが可能ですが、ここは地理的に孤立しているだけでなく、ローマ時代以前の遺跡も確認されていません(ここで発見された古代の石材は、アエトスから運んでこられたものです)。キオニは防衛面で問題があり、東側ではしばしば停泊地として使われたフリケスも悪天候や洪水の被害を受けやすい場所です。フリケスの周辺からは古代の遺跡が報告されていませんが、これは深い堆積層が調査を阻んできたためかもしれません。一方、この停泊地は、両方の海を見下ろすことができることから常に集落の場所として好まれたスタヴロスの尾根からアクセスしやすいという利点を持っています。

現代のアノギ周辺の高台は中世を通じて居住されていましたが、ここはきわめて土壌が貧しいため、ウィリアム・ゲルがこの地を訪れた1806年には、既に低地のキオニへの移住が始まっていました。偶然見つかったアルカイック時代からヘレニズム時代の数点の遺物がアノギから報告されていますが、それらの出土地点は定かではありません。19世紀の旅行者によってアノギで購入された遺物の多くが、村人たちによって他の場所から持ち込まれたもののようです(例えば、シュリーマンは1878年にアノギでポリスのコインを購入しています)。アノギにある唯一の古代の遺構はルウガの謎めいた城壁で、積極的な根拠はないものの、おそらくヘレニズム時代のものでしょうか。

イタカ島における考古学的な調査は、この島が喚起するホメロスへの関心、とりわけオデュッセウスの宮殿探しに拘束されてきました。しかし今日の私の議論の中では、ホメロスは、イタカ人が島のアイデンティティを構築する過程でオデュッセウスの受容が果たした役割に関してしか登場しません。これまでの考古学的証拠からは、これは前4世紀後半の島の貨幣で初めて検証され、前3世紀後半までには重要性を増していました。前208年頃の碑文(IG IX P 1729)には、アルテミスの祭祀の承認を促すためにマイアンドロス河畔のマグネシアから派遣された使節に対して、イタカ人はオデュッセイア祭でプロエドリアを与えることと、この返答をオデュッセイオン(未発見)に掲示す

ることを指示する内容が含まれています。

オデュッセウスの名前が最初に登場するのは、ポリス洞窟から出土した前2世紀か1世紀頃のアルテミスの仮面に刻まれた奉納碑文においてです。ポリス洞窟から出土した未発表の土器片の中には、‘Od..’という名前の一部を含んだ興味深いグラフィティがいくつかあります。これらは無文の土器片で、確実ではないものの、およそ古典期から初期ヘレニズム時代、おそらく前4~3世紀のものであろうと思われます。この年代観は、前6世紀以降にケファロニアからレウカスにかけて地域的なアイデンティティが興隆するなかで、イタカ人たちの政治的アイデンティティが高まっていったことと符合します。この地方的なアイデンティティに関する現段階で最も古い資料は、ケファロニアのパレから出土した、前6世紀の終わりごろの‘パレ人の’と刻まれたダマイネトスという人物の墓碑で、ケファロニアの4ポリスで貨幣の鋳造が始まるよりも若干早い年代に相当します。都市のエスニシティは通常自国内で意識されることはありませんでしたが、その片鱗は、海外(アテナイ)で亡くなりそこで埋葬されるといった事例から得ることができます。明らかに、パレという都市のエスニシティはこの時までには知られていましたが、どのくらいの期間そうであったのかを確定することはできません。地域的な表象や祭祀に加えて、ケファロニアの4ポリスは、様々な時期にケファロスをも自分たちの貨幣に採用していました。このような点はすべて、前5世紀以降の政治的関心が著しく西方に偏っていくというコンテキストの中で理解されなければなりません。しかし、そのようなコンテキストを正しく評価するには、さらに前の時代にまで遡って検討する必要があります。

初期鉄器時代のイタカ

初期鉄器時代は集落が南部に集中していた点で、イタカ島の歴史においては珍しい時期にあたります。アエトスはミケーネ時代からローマ帝政期にいたる時代の遺物が連続して出土する唯一の遺跡です。BSAによって発掘された初期鉄器時代の建築遺構については近年ナンシー・シメオノグルウが再検討を行っており、彼女はこれをニホリアの例に類似した大型住居として復元しています。土器の大半は前8世紀に流行したコリントス様式を自由に模倣した在地の様式のもので占められていて、おそらくコリントスからの実際の搬入品ではなく、アカイアや西ペロポネソス製でもあ

りません（この様式はコリントス湾の南北に広がっており、アカイア式のアルファベットが構築される過程を反映しています）。搬出されたイタカ製の土器はナポリ湾周辺に集中的に分布し、北はサトリカムにまで広がっています。それはヴィツァやペラホラから知られているカンディリオティスの工房のマークが底部に付された例とともにコリントス湾の北部や東部にも分布し、やや時代が下ると、植民市の確立とともにコルキュラとの繋がりが顕著になります。

アエトスのエリートは、西方の有力者のように自分たちの地位を金属製品によって誇示しました。多くの個人の装飾品は、様式的に北西ギリシアから東方エーゲ海やクレタまで影響が達していました。そして、近年、サランディス・シメオノグルウ率いるワシントン大学のチームが行った調査でトリポッドの脚部の鋳型が見つかったことから、おそらく、ポリス洞窟に奉納されたものも含めて、記念碑的な青銅製品は地元で製作されたものと思われます。実際、そのような青銅製品をテラコッタで模倣したものは、アエトスでも奉納されています。前8世紀後半までには、こうした遺跡で、彩色や立体的な装飾の図像、ケルノイやスタンドのような特徴的な器形から祭祀に関わるものと判断される遺物が出土するようになります。ナポリ湾地域で見られるものと密接に繋がる人物像や、ギリシア（大半がコリントス製）のものと同様、近東やイタリア方面の図像でも見られるような細密な線描写など、さまざまな要素が組み合わさった装飾が、数は少ないものの確認できます。例えば、ピテクーサイのサン・モンタノ墓地の第949墓から出土したイタカ様式のカントロスに描かれたチャリオットの行列シーンは、そこで委嘱された装飾かもしれませんが、イタカ島への憧れを表現したものだったかもしれません。ホメロス『オデュッセイア』4.601-608; 13.242) 岩だらけの島であると述べていますが、アエトスから出土した、盛装した人物が行進し向かい合っているシーンと横鞍に乗った男性の騎手が描かれたピュクシスと思われるものには、このホメロスの記述は該当しません。前8世紀後半から前7世紀にかけてエリートたちが地位を誇示するために用いた文化要素は多岐に及んでいますが、そのとりあわせにはきわめて独特なものがあります。

この点から、ポリス洞窟について見てみましょう。ポリス洞窟は遅くとも前8世紀頃までにはオデュッセウスの半神崇拝の場となっており、部外者、つまりイ

タカ島を経由する船乗りたちが途中で立ち寄った聖域として解釈されてきました。しかし、この遺跡の報告書は、当時の常として、遺物の報告にあたっては選択的であり、たとえば調理用の粗製土器などは一切省略されています。さらに、「洞穴」とされるものは、これまで一度も地形学にきちんと復元されていません。プロジェクトのメンバーはこの遺跡の古代における景観、古代から発掘時点まで（さらにはそれ以降）の地形の変化に関する調査を終えて、現在では、遺物の堆積層の分析からその利用の変遷を復元する作業に取り組んでいます。この研究はまだ進行中ですが、いくつかの予備的な観察は可能です。いわゆる「洞穴」は、実際のところスタヴロスの尾根に向かって開口する岩陰に過ぎず、スタヴロスから陸路でアクセスすることが可能でした。そして最も重要なことなのですが、「洞穴」とその上部のルッサノのアクロポリスは、アエトスのアクロポリスから眺めることのできる最北のポイントで、この聖域は、両方のエリアに対し北部におけるバシレウスの権力の標識として機能していたと考えられます。前6世紀の半ばまでに、遺跡から出土した最古の碑文には、崇拝される神々（アテナとヘラ）の *peripoloi* と呼ばれる、明らかに様々な形で構成された可能性のある集団について言及しています。しかし、古典期以前に、よりシンプルで安価な奉納品（とりわけ人物像類）を好む汎ギリシアの傾向にポリス聖域が追随するまでは、出土品から何らかの戦略的な機能分化を窺うことができます。というのも、確かにアエトスから出土した遺物と重なる部分がある一方、これら二つの聖域の奉納品には明らかな相互補完性が見受けられるからです。例えば、個人の装身具や小型の青銅器などはアエトスでより顕著であり、モニュメンタルな金属製品の奉納はポリス洞窟に限られています。このような観察は遺物の残り具合にも左右されますが、土器についてはそのようなことはないはずで、この場合も具象的な装飾と祭祀に特化した器形をもつ土器はもっぱらアエトスから出土しています。

以上を踏まえると、二つの遺跡から出土した遺物はまさに有力な縁戚関係で結ばれた西方のエリートによって奉納されたものと考えられ、どちらの遺構も一般的な西方の奉納行為のコンテクストから逸脱しているようには見えません。そのため有名なトリポッドの奉納も、祭祀の同定のための手掛かりとしてよりは、むしろこの長い奉納行為の歴史の中で理解されなければならないのです（これらのトリポッドがおそらくヘレニズム時代に再配置された経緯は、また別の問題で

す)。

アエトス、ポリス両方の聖域では、同じオリンピアの神々が崇拝されていたようです。IG IX 1² 1614では、ポリスでアテナ・ポリアス（これは島内において都市国家の存在を示す最古の手掛かりです）とヘラへの信仰が存在していたことが確認できますが、これらは確実ではないもののアエトスでも崇拝されていました。もっとも、ポリスにおけるヘラの添え名 *teleia* はかなり珍しいものです。アルテミス像はポリスから出土したヘレニズム時代のテラコッタ像の大部分を占めており、アエトスからも出土しています：IG IX 1² 1700はヴァシから出土した聖法に関する碑文で（おそらくアエトスから運ばれてヴァシで建材として使用されていたもの）、アルテミスの境内について言及しています。オデュッセウス崇拝と彼のパトロンであるアテナ（ポリアスという添え名は政治的な意義を強調しています）とを結びつけることは、大きな飛躍ではありませんが、この傾向がいつごろ始まったのかは不明です。プルタルコスが引用したアリストテレスの『イタカ人の国制』には、テレマコスに対し、イタカ人が小麦、ワイン、蜂の巣、オリーブオイル、塩、成獣などの報酬を献上することが言及されています。一見したところ、この内容は半神に関係する宗教儀礼のように見えますが、それが前4世紀をどれくらい遡るのか、また、どこでどのようにこの報酬が献上されたのかは分かりません。確実に言えることは、この聖域が南部と北部との結節点に位置していたため、この立地上の特性が聖域の重要性を通時的に変化させることになったという点です。アエトスでは、デクシアのニンフの洞穴にある古典期の聖域は言うまでもなく、アクロポリスの下に小さなアルカイック時代の神殿が存在したのに対し、北部においては、ヘレニズム時代後期からローマ時代にアイオス・アサナシオスの神殿が建てられる前には、それ以外の聖域が存在していたことを示す痕跡は見つかっていません。スタヴロスの尾根からは、明らかに宗教儀礼に関わるテラコッタの破片が少量見つかっていますが、それらのコンテクストは確実ではなく、出土状況も疑わしいと言わざるをえません。

ポリスを別にすれば、イタカ北部からは、初期鉄器時代の活動に関して、ごく僅かの情報しか得ることができません。スタヴロスのミケーネ時代の遺跡は、かろうじて原幾何学文様期まで続いていたと思われ、原幾何学文様期の土器がヤニナ大学によるアイオス・アサナシオスでの発掘で報告されています。そして、前8世紀の墓と「住居」がベントンによってスタヴロス

で発掘されています。しかし、ベントンの調査ノートに記されているトリス・ランガデスとピリカタ出土「幾何学文様期」の遺物については、現在では立証することは不可能であり、近年の踏査でもこの時期の遺物は見つかっていません。そのため、ポリス聖域についてはある程度その遺跡そのものから考察することが可能ですが、居住の歴史のギャップを埋めるにはアエトスを参照するしかありません。ケファロニア西部は、イタカに近い上に、後代につながりが生まれるにも関わらず、遺跡の多くは海面下に沈んでしまっています。現在のところ、最も古い確実な証拠（サメ出土）は前8世紀のもので、この年代はより広範なケファロニアの様相と適合します。とはいえ、ごく限られた部分での緊急調査であったということ、またサメとメタクサタ・カリケラから孤立した状態で原幾何学文様期の破片が見つかっていることには注意が必要です。

前古典期から古典期にかけてのイタカ

このような南北のアンバランスな状態は、アルカイック期から古典期初期にかけて徐々に弱まっていきますが、前4世紀末までなくなることはありませんでした。スタヴロスの現代の村の中心では、数多くのトレンチから前7世紀後半と前6世紀頃の集落の土器が見つかっており、これは墓（すべて土葬で、多くは瓦を組み合わせた墓）の数が安定して増えるのと軌を一にしています。集落はその後も発展したらしく、前5世紀初期にはプラトレイティアスの尾根上にも小規模な集落が誕生し、その後ポリスに向かう峡谷の北側の水系に沿って拡大しました。前4世紀までには、スタヴロスの集落は大規模なものとなり、その南と北には列をなした墓が点在するようになっていました。南側の墓地はポリス湾からの現代の道路の脇にあり、スタヴロスの村のずれを調査したシルビア・ベントンによって発見された遺物から、ごく初期から使用され始めていたことが分かります。そして、海に向かって下ったところで私たちが発掘した遺物からは、この墓地がローマ時代まで引き続き使用されていたことが判明しています。北側の墓地はスタヴロスからピリカタを経由してアイオス・アサナシオスに続く道沿いに続き、プラトレイティアスの斜面の下にも広がっています。アイオス・アサナシオスで発掘されたローマ時代の墓を別にすれば、これらの墓のほとんどは偶然発見されたものであり、多くの前4世紀後半から前1世紀初期

の墓碑は現代の村の周辺で見つかっています。

北側の集落の重要性が増していったことは、驚くにはあたりません。前7世紀の第3四半期に創建され、前5世紀から前2世紀にかけて規模だけではなく政治的な重要性においても著しく成長したレウカスの存在は、イタカ島の北側に新たな軸を形成しました。イタカ島は正式には依然としてギリシア本土の政治組織の外側に留まりましたが、北部の集落は次第に重要な海上ルートを探るために居住されるようになりました。物質文化の面でも、イタカ北部はこの時期を通じてレウカスと密接な関係にありました。たしかに、前古典期から古典期初期のペロポネソス半島（特にコリントス）から派生した器形はヘレニズム時代まで保たれ、アッティカとペロポネソス半島からの搬入品も島内全域に流通し続けたとはいえ、前5世紀を進むにつれて、それらは島の南部に集中するようになりました。一方北部では、アカルナニア、アイトリアや在地で生産された黒い釉薬のついた赤像式のものがより普及しています。

この状況は、都市国家の形成について興味深い問題をもたらします。アルカイック時代後期までに、イタカ島は、ローカルな政治アイデンティティの物質的表現に関して、ケファロニアに遅れをとるようになっていました。ケファロニアでは、前6世紀には、各ポリスにおいて神殿建設が始まっており、市壁がつくられるのもそれほど後ではありません。現存する遺構や遺物から判断する限り、建築様式やテラコッタはコルキュラと北部アドリア海からペロポネソス半島にいたる広い地域に由来しています。前5世紀初めまでには、パレのポリスとしての地位は明らかになっています。ここでは、ケファロニアにおける前5世紀から前4世紀初めのアテナイの活動、政治的、経済的な関心の西方へのシフト、駐屯兵の配置やクラネへのメッセニア人の植民、サメやクラネのような計画都市の建設（実際に完成したかどうかは別にして）などがケファロニアに与えたインパクトについて、詳しく述べる必要はないでしょう。イタカ島はこれらの活動の積極的なパートナーではなく、それをローカルな文脈で受け止めていたに過ぎませんでした。それは、アルカイック時代や古典期の公共建造物に関する証拠が乏しいことから明らかです。アエトスを別にすれば、北部では、後代の建物に偶然転用された建築部材しか見つかっておらず、そのいくつかは旅行家の記録でのみ知られているもので、現在では、原位置を確認できないのももちろんのこと、正確に年代づけられるものもほとんど

ありません。おそらく、多くの建材は、島の大半がヴェネチアの支配下になる前に事実上放棄された際、切り出されたり移動されたりしたのかもしれませんが、それでも基礎部分やテラコッタが存在しない点は注目に値します。これは、墓碑が目に見える形で再利用されているのとは対照的です。

ヘレニズム時代のイタカ

これまで議論してきた支配的なモデルは、低い居住人口と高い海上活動への依存というものでした。ギリシアの多くの都市の場合と同様、集約的な土地の利用は主要都市での発展があらゆる可耕地におよぶ古典期の末期からようやく現れ始めます。調査データからは、現代のスタヴロス周辺の斜面が、ポリス峡谷に市外のセンターを設けることによって集約的に使用されるようになったことや、集落の北の続きがピリカタの尾根に沿ってアイオス・アサナシオスに向かって着実に拡大していったことが分かります。このような状況は、前3世紀から前1世紀半ば（ローマの物質文化のインパクトが次第に感じられるようになるとはいえ、ここでは後に続くアウグストゥス帝の時代と区別するために便宜上ヘレニズム時代と呼びます）まで続きました。この段階までに、アイトリアとアカルナニアの連邦、とりわけレウカスに拠点をおくエペイロスのコイノンなどの成長がもたらした影響は明らかです。

もう一点考察すべき重要な点は、ヴェネチア時代以降、イタカ島民も近隣のメガニシ島からカラモス島、エキナデス諸島を経由した南の小さな島々を開拓していた可能性についてです。これは近代史からの類推ですが、たとえそれが不完全なものであっても（干しブドウやオリーブといった商品作物に対するヴェネチアからの圧力は、多くの土地所有者たちに島への植民を余儀なくさせました）、例えば、『オデュッセウス』（14.96–102）と比較すると、なんらかの影響を与えたと思われます。これらの島々の考古学的調査はごく一部に限られていますが、1930年代にベントンが行った広範囲に及ぶ踏査では、多くの地点で先史時代からヘレニズム時代の土器が見つかっています。

この時期の重要な革新は、レウカスからイタカ島を通して北部ケファロニアまでを視覚的に繋ぐ一連の塔の建設です。イタカ島における最古の塔はアエトスの上下の城塞システムに組み込まれたもので、時期はおそらく前4世紀末にあたると思われます。その後、さらに小さな塔がアイオス・アサナシオスに建てられ、

これは前4世紀の第3四半期に集落が再開してから半世紀後にあたります。これは、レウカスの塔を伴う農場に相当するものと考えられます。さらに新しい例が、ポリスの上手に位置するルッサノのアクロポリスに建てられた城壁で、これは、その背後の高台の峡谷に最初に集落が作られてから50年～100年後に建てられました。この城壁はアイオス・アサナシオス、高台の平地、スタヴロス、アエトスとの間を視覚的に結ぶ重要なものです。このエリアを支配することは、これらの高台を組織的に開拓することの始まりを意味し、おそらく、低地の耕作と平行して放牧が主に行われていたのでしょう。そして、先に述べたルウガの謎めいた城壁は、このようなコンテキストの中で理解すべきです。

アイオス・アサナシオスの集落は遅くとも前2世紀までには、規模は同じとはいえませんが、豊かさにおいてはアエトスと並ぶほどにまで急激に成長しました。しかしながら、これらの遺跡の調査は異なった視点から行われているので、その知見を細かく比較することは困難です。アイオス・アサナシオスでは、1930年にBSAは1km×500mのエリアのあちこちを試掘しヘレニズム時代とローマ時代初期の集落が見つかりましたが、その後の調査の関心はその下の塔と周辺より狭い範囲に向けられました。この遺跡は、遅くとも紀元後3世紀までの集落遺構を含んでいますが、この集落のプランと通時的な発展については不明なままです。

アエトスでのBSAの調査対象はもっぱら聖域とヘレニズム時代の塔が中心で、城塞とピソアエトスの港では試掘も行われています。丘の鞍部周辺に建てられた古典期とヘレニズム時代の住居は、ワシントン大学のチームによって調査されましたが、地表面に壁が見えている丘の斜面自体はまだ十分に調査されていません。目にするのできる壁周辺の予備調査と平面図の作成は、第35エフォリアのメンバーによって最近行われましたが、本格的な発掘が必要とされています。ローマ時代初期の土器がBSAの調査時に見つかり、数量はアイオス・アサナシオスのものと比べると非常に少ないのですが、後代の集落の広がりや年代についてはさらに調査されなければなりません。そのため現段階では、北部と南部との比較はまだ漠然としたものに留まります。

イタカ島の北部と南部はともに、ヘレニズム時代に非常に豊かな埋葬を行っていました。共通して、副葬品に初めてイタリアから輸入した陶器や宝石など、一

連の豪華な舶来品を納めています。北部では、いまだに新たな墓が見つかっておらず、全体として多くの遺物が19世紀初頭の学者たち（アエトスではギテラス、リー、シュリーマン、そしてスタヴロスではハラール・フォン・ハラールシュタイン）の収集によるもので、その種類も主に墓碑（大部分は再利用されたもの）に偏っています。しかし、エリートの人々の品々が島のどこでも共通しているのに対して、現在の証拠に基づくと、アイオス・アサナシオスからの日常生活に関わる出土品は多様であり、「ローマ」の物質文化のローカルな消費について重要な知見をもたらしてくれます。中でも舶来の食器類は多種多様で、例えば、エフェソスからエピルスで見られるメガラ式ボウルや、ミュティレネ製の釉薬のついた器、イタリア製の黒色釉薬の器などがありました。調理ポットから判断すると、調理方法は少なくとも紀元後1世紀末または2世紀まで断固としてギリシア風（南エピルスで行われていたように）を保っていたのですが、伝統的にはコリントス様式の（時にはアルカイック時代に遡る）二重浸し塗りの製陶技術を採用していました。そして恐らくもっとも完璧な事例は、近くの墓から出土した前3世紀後期の西斜面式の装飾を施したカンタロスでしょう。

イタカ島の歴史について数少ない特定できる事件は、先述したIG IX 1² 1729に現れる、イタカ島民がマグネシアからの使節に返答したという出来事です。単一の史料から過大な解釈を行うことは戒めなければなりません。この碑文からは、一連の組織（決議を公布する民会 *ekklesia*、施設を迎える迎賓館 *patrionestian*）と役人（3人のダミウルゴイ、1人のエピダミウルゴス、テアロドコス（プライロスの息子イゲルタス））を伴った一つのポリスの行動をうかがうことができます（27行目に、名称として *ton Ithakesion* という文言があります）。ここには、国家としてのポリスの姿がはっきりと打ち出されています。「女神たち」（イタカ島のアテナ、もしくはマグネシア人のアルテミス）に15ドラクマ分の初穂を献上することが規定され、オデュッセイオンの神官は名祖執政官と並んで記されるほど重要な役職でした。このような組織の歴史をどこまで遡ることができるかは知る由もありません。

しかし、イタカの民会が、マグネシア人の要請に対し、ケファロニアの近隣都市からは独立して応じているのは興味深い点です。というのも、これと類似する内容を刻したあるケファロニアの決議碑文（サメの決

議碑文 IG IX 1² 1582) は、4 ポリスの他の都市であるパレ、クランノイ、プロンノイに言及しながら、「そして彼らもこれに従って投票した」という定型句で閉じられているからです。形式的にはサメは独立して行動していますが、実際のところは、他のポリスと共同で活動していたのです。この定型句は便利で簡単な言い回しであり、確かに珍しいものではありませんが、このことはイタカがこの地理的ブロックの外部に位置していたことを意味しています。この違いは、間もなくイタカが前2世紀の第1四半世紀のデルフォイのリストである神聖使節の受け入れに関わる役人 *theorodokoi* のカタログに最初に現れるようになると、さらに顕著になります。史料が十分にある訳ではありませんが、ジョン・フォッシーが指摘するように、イタカ島が国家間の宗教的な制度においてより重要な役割を担うようになったことは注目に値します。というのも、イタカは、ペロポネソスのルートの一部として碑文の別の箇所に挙げられているケファロニアのテトラポリスとは別に、北西ギリシア（コルキュラ、レウカス、アカルナニア）のルートの一部としてデルフォイのカタログの中に登場しているからです。前4世紀後半の *theorodokia* に関するエピダウロス、ネメア、アルゴスの記録が示すように、この北西ルートはすでに確立されたもので、恐らく（たとえ立証できなくとも）デルフォイの碑文はイタカをこのルートの中に単に加えただけなのかもしれません。ケファロニアの都市とペロポネソスとの繋がりも、すでに前4世紀後期までには確立されており、もし政治的な状況がそれを良しとするならば、このルートをイタカ島まで少し延長させることは十分に可能だったはずです。

このマグネシア決議の内容にも、島内の南北の複雑なバランスに関するヒントが含まれています。というのも、そこには二つの異なる聖域、すなわちアテナ聖域とオデュッセイオンのそれぞれに碑文を建てることという規定があるからです。アテナの聖域はヒエロンと呼ばれていますが、オデュッセイオンの位置づけについては、アテナの聖域との関連、及びその神官を命名する決議碑文の2行目を復元することで推測が可能です。もしオデュッセイオンが実際にイタカ島の北部のポリス洞窟のことだったのなら、これは南北の均衡を保つこと、アテナ（イオニア諸島で広く崇拝されていた女神）との関係におけるオデュッセウスの地位を強くすることなどと、どのように関係していたのでしょうか？

より一般的には、このように資源の質・量において

も大きな不均衡が存在しなかった二つの地域によって構成されたこの島が、とりわけ人口の多い時期に二つのポリスに分かれなかったのはなぜなのかを考察するのは興味深いことです。これらのポリスは確かに小規模なものになったでしょうが、より幅広いギリシアの標準からすればありえないこともないですし、他の圧力（例えば土地相続）がそれぞれの地域の自治を望ましいとすることもありえたでしょう。アリストテレスの『イタカ人の国制』は、ともにオデュッセウスを先祖とする二つの氏族（コリアダイとブウコリアダイ）の名を挙げていますが、それぞれの地理的な範囲については何も史料がありません。まったく逆に、島内と周囲の海峡の反対側との両方で密接に連絡をとりあっている状態だと、圧倒的な安心感と経済的な利点があったと指摘することもできるでしょう。近年の重要な研究で、クリスティ・コンスタンタコプルーは、一つの島が複数のポリスに分割されている場合、ローカルなポリスのアイデンティティに対して島レベルでのアイデンティティの表出がバランスをとっていた可能性を指摘しています。一見したところ、イタカ島の状況は単純です。つまり、島とポリスのアイデンティティは同一で、単に他のローカルな圧力が存在していただけである、と。しかし、一つのポリスを一貫して選択したという歴史的な事実の前では、その背後にあった論理的根拠についてより周到に注意を払うのが賢明でしょう。

ローマ時代のイタカ

アウグストゥス帝の時代の集落組織は、著しい変化を見せています。ニコポリスの建設に続いて、レウカスは徐々に続く2世紀間に渡って衰退しました。ケファロニアでは一連のウィラが検察されたり拡張されたりし、サメとパノルモスの東部に位置する二つの港は大規模な集落となりました。イタカ島では、アイオス・アサナシオスと、ポリス湾の南パノルモスの反対側に位置するアイオス・ヨルゴスの新しい小さな海際の町でのみ、前1世紀後半から後1世紀初頭にかけての陶器が見つかっています（ともに精製の食器とカンパーニア製のアンフォラが出土しています）。ポリス洞窟から出土した数少ないローマ時代初期の陶器の詳細な年代決定はできませんが、アウグストゥス帝の時代の破片もいくらか含まれているようです。その後、ヴァシには水深の深い港が設けられ、アエトスやスタヴロスを含む多くの遺跡から後2世紀の遺物が出土し

ています。ヘレニズム時代と比べると、帝政初期のイタカ島は、特に役割のない僻地であったように見えます。

陶器のレパトリーは、パトラス工房で作られた東方シギリタ A 様式（型押し文様のある陶器）も含まれていますが、ほとんどの食器類はケファロニアからコルキュラ方面に延び、さらにアドリア海一帯に及ぶ沿岸地域で作られたものでした（とはいえ、どれくらいの数の工房がこの地域内のどこにあったのかは今後の研究課題です）。鋳型式の成型システムの導入が技術上の変化を引き起こしましたが、必ずしもすべての工房がこの新たな製作技術を望み、必要としていたわけではありませんでした。アイオス・アサナシオスのレパトリーは平皿類に極端に偏っており、この土地から出土したあらゆる種類の型押し文様の陶器に一体誰が投資したのかについては証拠がありません。ポリス湾の瓦窯はローマ時代初期のものようです。他の形の失敗品がないため、他所の土製品がここで焼成されたのかは定かではありませんが、上部の盛り土の中には5世紀から7世紀頃の豊富な堆積層があります。

遺物の少ないこの時代は、長い歴史の中のほんの一段落に過ぎません。ケファロニアとイタカ島北部ではローマ時代の後期に復興が進み、中世や初期ヴェネチア時代の特徴となる複雑な高地システムの発展に至る高地と低地の居住が進みました。そのような復興は、ニコポリス周辺のほとんどの地域の特徴であり、中心地がだんだんと荒廃していくにつれ、イタカ島では居住と開拓パターンの長期的な変化のさきがけとなりました。

おわりに

今回の私の話をまとめるなら、考古学的なデータに見られる長期的なパターンから、イタカ人であることの本当の意味についての検討が可能となります。特定

のイタカ人アイデンティティが確立されることは（とりわけヘレニズム時代においては）めったにありませんでした。初期鉄器時代には、その後は再び目にする事ができない地域性の強調が見られました。反対に、アルカイック時代から初期古典期にかけては、特定のアイデンティティはあまり顕著にはなりません。初期鉄器時代とヘレニズム時代では、外部世界と繋がる幅広いネットワークが局所的に発展した商品やイメージ、アイデアなどを提供しました。そしてヘレニズム時代の場合は、市場の存在が集約的な在地の農業を支えたのです。外から押しつけられたアウグストゥスの支配は、ローカルなアイデンティティを打ち消しました。そして、ポリス洞窟のローカルな聖域が著しく衰退していったのも、この支配による直接の結果であると論じたくになります。アクティウムの海戦のわずか4年前である前35年に、解放奴隷のエパフロデイトゥスという軟膏商人が、奉納碑文を携えてこの聖域に参詣したことを記念しています。しかし、これは珍しい記録であり、聖域から出土した持ち運びが可能な遺物は、ローマ時代初期には活動が急速に衰退していったことを示しており、後の時代に復活することはありませんでした。

小さな島についての研究の大半は、島と特定の周辺地域との関係を、従属関係、対抗、意識的な差別化といった点から強調してきました。イタカ島の場合は、小さな島がここではそれ自体より大きな島やより小さな島に挟まれているため、かなり異なっており、「周辺地域」も文化的・経済的そしてより幅広い政治的意味合いの中で変化しました。いくつかの点において、イタカ島で見られるパタンは、例えば、重要な輸送路にあたる複雑な峡谷の状況により近いように見えます。さわめて変化の激しかったイタカ島のアイデンティティは、このような背景、並びにホメロス（少なくともその英雄）の受容に照らして理解されなくてはならないのです。